

連歌とジャズ

マック・ホートン

カリフォルニア大学バークレー校

中世において、連歌は日本で最もポピュラーな文学活動であった。連歌は17文字(5・7・5)と14文字(7・7)の句をつないでいき、100句の詩(百韻)を作り上げるセッションであり、貴族にも庶民にも同様に行われた。しかし、この伝統的な芸術の形式(有心)は、何ページにも及ぶ規則(式目)とともに、江戸時代には不明瞭な状態にまで廃れてしまい、この3世紀の間はほとんど忘れ去られてしまっている。

それでは、連歌がかつて備えていたとてつもない魅力を、我々はどうやって理解すればよいのだろうか。その1つの方法は、いまだ盛んであるパフォーマンスを媒介として比べてみるとある。それはつまり、ジャズとの比較である。連歌のような、集団意識(一味同心)と個々の創造性との間で揺れ動く不安定なエネルギーは、ジャズにもある。連歌師と同様、どの演奏者も、どこで自分がソロを取り、どこで背景に溶け込めばよいかを理解し、全体として完成された芸術作品を作り上げることが出来る。一方でまた、この両方の芸術形式では、他の参加者と競い合う意識が強く働いている。ジャズの歴史は、2人の演奏者が互いに相手を打ち負かそうとした「斬り合い」の歴史だと言える。ジャズのように、付合は社交的あるいは芸術的感覚が、当意即妙な機知と結びついて出来るものであり、一つの句が出た瞬間から、連歌師たちは次の句をうまく作ろうと競い合うのである。当時の連歌創作についての書物である『連歌比况集』は、付合の様子を鷹狩りに比してこう述べている。

例へば鳥の立を見て、數多の鷹を合するに、其中に手きゝの逸物とりて、餘は空しく歸るにことならず。

ジャズも連歌とともに、規則と、表現の自由との間のバランスを楽しんでいる点も共通している。付合には何百もの規則があり、受け入れられる詩句の種類や頻度を制限している。例えば基本的な規則集である『連歌新式追加竝新式今案等』にあるこの記述を見ると、その複雑さに驚かされる。

薰といふ句に焦ると付けて、又紅葉を付くべからず。船にて是を付くべし。こがると云ふ字かはる故也。煙と云ふ句に里と付けて、又柴燒など薪の類を付くべからず。しかし、この制限の中でこそ、個々の創造性を打ち出す機会が、ほとんど無制限に与えら

れているのである。ジャズでも同様に、一つの曲は、一連の旋律のライン、リズム、テンポ、そしてコード進行を持っており、連歌の規則同様、複雑である（例えば”Lush Life”、”Skylark”、”Body and Soul”などの楽曲を思い出してほしい）。しかし、こうした基本的な技術的制限の中で、各々の演奏者はその曲を即興で解釈して演奏する自由を、半ば強制的に与えられている。連歌師同様、演奏者は、前の演奏者に応答し、ベースとしてあるコード進行に従って演奏する。しかしそれは、演奏者個々のインスピレーションを犠牲にするということではない。実際、こうした規則も楽しみの一部なのである。そうでなければ、ちょうどロバート・フロストが自由詩についていったように、ネットも無しにテニスをやるようなものになってしまう。

規則があることによる利点はもう一つある。それは、新参者でもすぐに連歌の「場」、あるいはジャズの「場」に参加し、相関させることが出来ることである。今まで会ったこともない人とでも、互いに協力し合い、複雑で緊密な芸術的創造の瞬間を共有し、互いのバックグラウンドの差を感じ、いまこの瞬間一緒に調和しているのだと確信することが出来るだろう。彼らはこのあと、ひょっとするとまったく再び出会うことなく、それぞれ別々の道を歩むかもしれない。

要するに、連歌やジャズの本質は何かと言えば、その「当座性」である。両者とも、その生成の場にいなければ意味がないのである。付合のセッションの最終的な記録である懐紙、またジャズセッションのLPレコードやCDは、かつて生き生きと活動していたものの化石の残骸にすぎないのである。

『国際化の中の日本文学研究』。伊井春樹編。
大阪大学国語国文学会（2002年）所収（pp. 83-84）。